

# 舍利石鐵墓誌の研究

森 部 豊 ・ 齊 藤 茂 雄

## Study of Sheli Shitie's (舍利石鐵) Epitaph

MORIBE Yutaka SAITO Shigeo

This paper examines the translation and the translator's notes of the epitaph for Sheli Shitie, a Turkish pastral nomad. According to our historical researches, Sheli Shitie was born in the Second Türk Khaghanate, North Mongolia, in 733AD. After the fall of the Second Türk Khaghanate, Sheli Shitie remained in North Mongolia and followed Toquz Oγuz with his father, Geluozhan 葛邏旃. He then got involved in a power struggle that erupted in Toquz Oγuz's reign. When Uyghur defeated Tay Bilgä Totoq, an anti-Uyghur leader and Bayırqu chieftain, Sheli Shitie moved to Tang along with his father in 749. Sheli Shitie played an important military role in Tang under the regional military administrative system called *Jiedushi* 節度使, by fighting in the An-Shi 安史 Rebellion on Tang's side, and once the Rebellion was over, by actively engaging in suppressing rebellions in the *Jiedushi* army in Hedong 河東. In 790, he died at the age of fifty-eight. The way Tang controlled foreign ethnic tribes after the establishment of the Second Türk Khaghanate in 682 was unknown from previous studies. Sheli Shitie's epitaph is an important record that can tell us the nature of Tang's control over different groups in the latter half of the dynasty.

## はじめに

本稿は、トルコ系騎馬遊牧民出身の舍利石鐵墓誌の釈読とその分析を通じて、「安史の乱」後の唐朝におけるトルコ系民族の実態を明らかにしようとするものである。

舍利石鐵の姓である「舍利」とは、もともと突厥の「十二姓」の一つにふくまれる舍利吐利部に由来するものである。630（貞観4）年に突厥第一可汗国が滅亡した時、突厥遺民の措置をめぐっては唐朝廷内においても論争があり、すぐには決着がつかなかった。石見清裕〔1987（1998）pp. 110-123〕によれば、633（貞観7）年から634（貞観8）年にかけてその最終措置案がまとまり、その結果、南モンゴル（漠南）に定襄都督府（内モンゴル自治区和林格爾県土城子遺跡）と雲中都督府（内モンゴル自治区托克托県市街地周辺）およびその管轄下の六州と、それに接する南側の幽州（河北北部）から靈州（オールドス）の地に順州や祐州など四州が置かれたという。

ただ、これら突厥遺民は、徐々に勢力回復の兆しをみせ、639（貞観13）年4月に太宗が九成宮に行幸した時、随行していた阿史那一族が反乱を起こし、太宗の寝所近くまで侵入する事件を引き起こした。この「反乱」は未遂に終わったが、唐朝に与えた衝撃は大きく、同年8月、阿史那思摩を可汗に任じ、オールドスにいたソグド人を含む突厥遺民を率いて、黄河の北へ戻させている。つまり、長安からなるべく遠くへ突厥を遠ざけようとしたのである。ただ、阿史那思摩はこの任務に失敗し、643（貞観17）年には任務を放棄し、オールドスの勝州（内モンゴル自治区准格爾旗）・夏州（陝西省靖辺県）に戻ってしまった。

その後、646（貞観20）年に薛延陀が唐朝の策略によって崩壊すると、唐朝は薛延陀に服属していたトルコ系諸族（鉄勒）を北モンゴル（漠北）において羈縻した。一方、南モンゴルの突厥遺民は、649（貞観23）年に定襄・雲中両都督府下十一州に再編された。この時、雲中都督府管下に置かれた羈縻州の一つが舍利州である。ちなみに664（麟徳元）年には両都督府を管轄する单于都護府が設置された。

この羈縻支配体制は突厥第二可汗国（682～744）の独立によって崩壊し、定襄・雲中両都督府下十一州に編成されていた多くの突厥遺民は唐の支配から離脱した。そして、それ以降には大規模な羈縻州の経営は行われなくなったと考えられる〔cf. 齊藤 2011, pp. 32-33〕。とはいえ、突厥第二可汗国の勃興にともなって離脱した突厥の遺民が、その後のモンゴリアにおけるいくつかの政変などにより、唐朝領域内へ移動する例がしばしば見られる。例えば、第二可汗国第2代カプガン可汗（黙啜；在位691～714）死去の前後の時期や、第二可汗国崩壊の時期（742～744頃）、突厥の後にモンゴル高原を支配した東ウイグル可汗国（744～840）崩壊時などであ

る。さらには、これらの突厥遺民のうちソグド人と結びついたソグド系突厥が、北中国を移動する様子も、史料上跡付けられる [森部 2010]。このように、羈縻支配体制崩壊後も唐には新たな遊牧民が時に流入しているにもかかわらず、彼らがいかに唐朝と関わっていたかは、いまだほとんど解明されていないのである。

このように不明な点が多い突厥第二可汗国勃興後の羈縻支配体制について、今までの研究によって、藩鎮の反乱鎮圧に「蕃将」が起用されていること [馬馳 2011, pp. 144-151]、羈縻支配下の遊牧民は部落単位で生活していたこと [孫 1995, pp. 111-119; 山下 2011, pp. 7-8]、唐朝がこれらの遊牧民を部落の単位を越えた大規模な軍団として編成する場合、支配下部落と関係しない武将に統率させたこと [谷口 1978, pp. 19-20; 金 2000, p. 202]、押蕃部落使の称号が統率者に与えられていたこと [村井 2003] などが明らかにされてきた。しかし、「安史の乱」前後に唐へ移住してきたトルコ系民族が、特に唐後半期の政治史・軍事史のうえで大きな役割を演じた節度使といかなる関係を持ったのかという点については、いまだに十分に明らかにされているとはいいがたい。

本稿で取り上げる舍利石鐵は、突厥第二可汗国滅亡後に唐朝へ帰順してきた家系に属している。そのため、「舍利石鐵墓誌」に記された情報は、唐代後半期の羈縻支配体制やトルコ系遊牧民の民族移動を考察する上で貴重なものであり、突厥滅亡後の知られざる民族移動についても貴重な史料を残している。それゆえ、本稿で取り上げる次第である。

「舍利石鐵墓誌」は1985年に山西省太原市北郊区小井峪村の東で発見された。原石の大きさは、縦44センチ、横46センチで、墓誌蓋は縦47センチ、横45センチである。墓誌銘文は楷書で書かれている。現在は太原市文物管理委員会が所蔵しているようである。拓本写真は『隋唐五代墓誌匯編・山西卷』（天津古籍出版社、1991, p. 143）に掲載され、録文は『唐代墓誌彙編續集』（上海古籍出版社、2001, pp. 743-744）および『全唐文補遺』第6冊（三秦出版社、1999, p. 467）に掲載するが、誤字があり、注意を要する。

なお、本稿第1章の訳注部分は森部が主催する関西大学出土文書ゼミナールにおいて、岡部美沙子・岡本優紀・佐藤もも子（以上3名、関西大学大学院）・新見まどか（大阪大学大学院）が分担して訳注を作成し、それを齊藤・森部が修正したうえでまとめたものである。

## 1. 舍利石鐵墓誌訳注

### 【釈文】

1. 唐故河東節度先鋒馬軍兵馬副使・開府儀同三司・試殿中監・上<sup>柱</sup>
2. 國・食邑三千戸・狄道郡王、舍利公墓誌銘<sup>并序</sup>

3. 公諱石鐵、字石鐵、北方人也。曾祖並本蕃豪傑、位望雄重。父葛邏旃、
4. 往因九姓離散、投化 皇朝、授蕃州刺史。公幼而雄毅、勲習騎射、
5. □寶射雕之箭、落鷹之弓。自多難數十年、東西百餘戰、累遷班
6. 秩、烈公卿。頃者、侍中馬公救鉅鏹、取降臺、東破洹水陣、南拔河中城、及西
7. 遷犬戎以安河曲。公賈勇先登、捐軀決勝。突圍觸刃、何媿張遼。□衆□
8. 生、寧慙關羽。侍中嘉其勇、錄其功魏<sup>橋</sup>。迴日、表封狄道郡王。入奏之時、舉<sup>爲</sup>
9. 兵馬副使。自守位居職、治道勲王、名顯軍戎、義行親屬。春秋五十有八、貞元
10. 六年二月十二日、遘疾辰朝、終於乙夜。臨汾里之私第。嗚呼、人之云亡、邦
11. 國殄萃。連嘶征馬、聲咽筋簫。落淚故人、情傷薤露。以其
12. 年春三月五日、遷殯於城北義井村北平原。禮也。嗣子
13. 海賓等、生事愛敬、死事哀戚、泣高柴之血、絕曾
14. 子<sup>之</sup><sup>漿</sup>。刊石為銘、記之泉戶。銘曰。
15. 雄々□□、諤々良才。前驅之用、遇敵皆摧。壯志全矣、忠
16. 心<sup>象</sup>哉。□河逝水、東流不迴。

### 【訓読】

唐の故河東節度先鋒馬軍兵馬副使・開府儀同三司・試殿中監・上柱國・食邑三千戸・狄道郡王舍利公の墓誌銘並びに序。

公、諱は石鐵、字は石鐵、北方の人なり。曾祖は並な本蕃の豪傑にして、位望は雄重たり。父は葛邏旃<sup>むかし</sup>、往、九姓の離散するに因りて、皇朝に投化し、蕃州刺史を授けらる。公、幼くして雄毅たり、騎射を勲習す。□寶は射雕の箭、落鷹の弓なり。多難自り數十年、東西百餘戰し、班秩を累遷し、公卿に烈す。頃者、侍中馬公、鉅鏹を救い、降臺を収め、東のかた洹水の陣を破り、南のかた河中城を抜き、西のかた犬戎を遷すに及び以て河曲を安んず。公、勇を買ひ先に登り、軀を捐て勝を決す。圍を突き刃に觸るるは、何んぞ張遼に媿じん。□衆□生、寧んぞ關羽に慙じん。侍中は其の勇を嘉し、其れ魏<sup>橋</sup>に功たるを録す。迴日、表して狄道郡王に封ぜられる。入奏の時、舉げて兵馬副使と<sup>爲</sup>る。自ら位を守り職に居し、道を治め王に勲め、名は軍戎に<sup>あらわ</sup>顯れ、義は親屬に行う。春秋五十有八、貞元六年二月十二日、辰朝に遘疾し、乙夜に終わる。臨汾里の私第にて。嗚呼、人の<sup>云</sup>に亡ぶれば、邦國殄萃す。連嘶する征馬、聲咽する筋簫。落淚する故人、情傷する<sup>かいろ</sup>薤露。その年の春三月五日を以て、城北の義井村の北の平原に遷殯す。禮なり。嗣子の海賓等、生事に愛敬し、死事に哀戚し、高柴の血を泣き、曾子の漿を絶つ。石に<sup>刊</sup>して銘と為し、之を泉戸に記さん。銘に曰く。

雄雄たる□□、諤諤たる良才。前驅<sup>はたらき</sup>の用、敵に遇えば皆摧<sup>くだ</sup>く。壯志全きかな、忠心をば象<sup>かたど</sup>るかな。□河逝水し、東流して廻らず。

【試訳】※訳者補訳は〔 〕、訳者補注は（ ）とする。

唐故河東節度先鋒馬軍兵馬副使・開府儀同三司・試殿中監・上柱国・食邑三千戸・狄道郡王である舍利公の墓誌銘ならびに序。

公は、諱を石鐵、字を石鐵といい、北方出身の人である。先祖はみな漠北の諸部族の中でも勇猛な人であって、位や声望も大変重かった。父の名は葛邏旃といい、往年、「九姓鉄勒」が離散したとき、唐王朝に帰順して羈縻州の長官を授けられた。公は幼い頃から武勇に優れ意志がかたく、力をつくして騎射を習得した。〔その結果、その腕前は〕飛んでいる鷲を射るほどの、また鷹を落とすほどの弓矢のわざとなった。国家の災難（安史の乱）より数十年、東西で多くの戦いに参加し、職位は次々と累進し、高位高官となった。そのころ、侍中の馬燧（馬燧）は、〔魏博節度使の田悦に攻撃された〕鉅鐘（邢州）を救い、投降してきた者をおさめ、東方では〔田悦が布いた〕洹水の陣を破り、南方では〔反乱を起こした李懷光がよった〕河中府を攻めとり、西方では吐蕃を追いやることによってオールドスを鎮めた。舍利石鐵は〔これらの戦いの中で〕勇敢たる姿で軍の先頭に立ち、国家の為に正義を貫き勝利をおさめた。敵軍に向かっていき、その刃に触れるような〔舍利石鐵の〕様子は張遼に恥じることはない。□□の様子は関羽に恥じることはない。侍中の馬燧はその勇を喜び、〔魏博討伐において河北の〕魏橋で功績があったことを記録した。他日、上表して狄道郡王に封じられた。朝廷に参上し奏上した時、兵馬副使に登用された。しぜん官職を保持して職にあり続け、道を治めて天子につかえた。その名は軍隊に知れわたり、親族に仁義が行われた。五十八才のとき、貞元六（790）年二月十二日の早朝に病気となり、その夜の10時ころ、〔太原の〕臨汾里の自宅で亡くなった。ああ！〔公のような〕人が亡くなれば、国が衰亡する。戦馬はしきりにいななき、葬儀の際の笛の音はむせび泣く〔ように鳴っている〕。昔なじみの友人は涙を流し、挽歌に心が悲しみいたんでいる。その年の春三月五日に城北の義井村の北の平原に棺を埋葬した。礼にかなっている。跡継ぎの海賓たちは、親である公が生きているときには愛し敬い、亡くなったときには死を悲しみ悼んで、高柴のように血のような涙を流し、曾子のように飲み物を絶った。石に刻んで銘とし、これを墓門に記すこととしよう。銘にいわく、

優れた□□、剛直な才能。先鋒としてのはたらきは、敵に遇えばすべてを打ち砕いた。勇ましい志が具わっていることだ。忠心にのっとっていることだ。□河の水は流れ去り再び還ってくることはなく、東流して消え去り戻ってくることはない〔ように、公もこの世を去ってしまっ

た]。

### 【語釈】

1-1 「河東節度先鋒馬軍兵馬副使」：河東節度使の淵源は、711（景雲2）年にさかのぼることができる。当初の目的は突厥の制御であった。751（天宝10）年に安祿山が河東節度使を兼任し、「安史の乱」（755～763）の舞台となった。乱後はウイグルに対する防御の役割のほか、河北地域に残存した旧安史軍系の藩鎮を牽制する役割も果たした。

「先鋒馬軍兵馬副使」は、河東節度使麾下の軍将。藩鎮の構造に関しては、総合的かつ詳細な研究は無く、この軍職も具体的なことは不明。文字面から判断すれば、河東節度使の先鋒騎馬隊を率いる副将といったところであろうか。「兵馬副使」は、唐代には楊譚「劍南節度破西山賊露布」[[『文苑英華』卷648] で、賊を破った者の名前を羅列した中（都知西山子弟兵馬副使・左金吾衛大將軍・攝臨翼郡太守董郃麴）と、同じく吐蕃と戦った人名を羅列した中（兵馬副使翟步離）の計二つを検索しえたのみであり、具体的な地位などは判然としない。しかし、「兵馬副使」と似て頻出する軍将名に「副兵馬使」がある。これは兵馬使に次ぐ地位で、実際に軍隊を率いて戦闘にあたった[馮 1997, pp. 138-141]。例えば昭義節度使では、都知兵馬使—正兵馬使—副兵馬使—十将—副将という軍職の序列が見られたことが明らかにされている[渡邊 1994, p. 6]。十将が部隊長クラスの下級軍将であり、都知兵馬使が兵馬使中最高の地位で麾下の軍団を総括していたことを勘案すると、副兵馬使は両者の間に位置する中級クラスの武将であったと考えられる。もし兵馬副使=副兵馬使なら、舍利石鐵も兵馬使に次ぐ地位として実際に馬軍を率いていたと考えられる。

1-2 「開府儀同三司」：文散官。従一品。

1-3 「試殿中監」：殿中監は職事官で、殿中省の長官。従三品。ただし、「試」とあるので実際にその職務を行っていたわけではなく、使職を帯びた者が実際の官僚機構の中でどういう待遇になるのかを示したものである。

1-4 「上柱国」：勳官。正二品。「柱」の字は原石では欠けているが、勳官名から補った。

2-1 「食邑三千戸」：爵号。食邑（食封）は爵位に伴って与えられた俸給であるが、大概は名目的なものに過ぎず、本墓誌の場合も例外ではない。なお、実質を伴う場合には「実」の字がつき、「食実封〇〇戸」等の表記になる。

2-2 「狄道郡王」：爵位。郡王は、唐の九等爵の中で王（国王）に次ぐ第二位。狄道郡は隴右道蘭州。

2-3 「舍利」：突厥の「十二姓」の一つ舍利吐利部に属したことを指す姓。舍利吐利部は突

厥第一可汗国滅亡後の649（貞観23）年、雲中都督府管下の舍利州に安置されるのが、史料上の初見 [cf. 石見 1986 (1998), p. 130, 表 2]。また、突厥第二可汗国が滅亡した後、陰山周辺に拠った突厥遺民集団、「ブグチョル十二部」の中にも Shar-du-li（舍利吐利）族としてその名が見えており [森安 1977b, p. 3；森安 2007, p. 319]、突厥第二可汗国を構成する部族のひとつと考えられる [鈴木 2006, pp. 3-6]。

3-1 「葛邏旃」：研究ノート参照。

4-1 「九姓離散」：研究ノート参照。

4-2 「蕃州刺史」：何らかの羈縻州のことを指すと思われる。蘇航氏は九姓鉄勒の一部族である阿跌部出身の李良臣が鶏田州刺史であり、彼が死んだとき（762年）息子の李光進らが年少だったため、娘婿の葛邏旃が鶏田州刺史を継いだ（つまり蕃州刺史＝鶏田州刺史）とする [蘇航 2010, pp. 263-264]。しかし、鶏田州は阿跌部に置かれた羈縻州なので、舍利部出身の人物がそれを継ぎうるのかという疑問は残る。他の可能性として、例えば葛邏旃に拠った李光進兄弟が「太原に家」していたことから太原付近、あるいは2-3で言及した舍利州ではないかなど推測は出来るが、具体的な場所は不明。ただ、この誌文だけでは、具体的な州名を復元することは困難である。訳文としては、「羈縻州の長官」としておく。

5-1 「射雕之箭」：弓を射るのが巧みであることのとえ。『史記』卷109「李將軍列伝（李広伝）」に以下のように見える。

匈奴大いに上郡に入る。天子、中貴人をして〔李〕廣に従い勅して兵を習い匈奴を撃たしむ。中貴人、騎數十を將いて縦し、匈奴三人を見るや、與に戦う。三人還り射ち、中貴人を傷つけ、其の騎を殺して且に盡きんとす。中貴人、廣に走る。廣曰く「是れ必ず射雕者なり」と。

匈奴大入上郡。天子使中貴人從廣勅習兵擊匈奴。中貴人將騎數十縱、見匈奴三人、與戰。三人還射、傷中貴人、殺其騎且盡。中貴人走廣。廣曰「是必射雕者也」。

5-2 「落鷹之弓」：「落鷹」は典拠不明。ここでは「射雕之箭」と対句的表現になっているので、鷹を射落とすほどの見事な弓の使い手、あるいは強い弓の使い手であると被葬者を称えた表現と考える。

5-3 「多難」：災難の意味だが、墓誌の書かれた年代から判断して、安史の乱（755～763）を指すものと考えられる。安史の乱を「多難」と表現する例は、『旧唐書』卷120「郭子儀伝」に見える。

昔天寶多難、羯胡、禍を作し、咸秦は險を失い、河洛は戎と為る。

昔天寶多難、羯胡作禍、咸秦失險、河洛為戎。

6-1 「侍中馬公」：馬燧（726～795）を指す。字は洵美、汝州郟城（河南省郟県）の人。父は幽州節度使下の経略軍使であり、馬燧も安祿山が兵を起こすまで幽州にいたが、乱が発生すると幽州を脱し、唐朝側へ走った。以後、唐朝に仕え、775（大暦10）年に河陽三城の兵乱の鎮圧に功績を挙げ、河陽三城使に任命された。ついで河東節度使となり、徳宗の建中年間に河北・山東の諸藩鎮が起こした「反乱」鎮圧に従事した。また、河中の叛将李懷光を殲滅したが、787（貞元3）年に、後述する「平涼の偽盟」を招いたため、軍隊の指揮権を解かれた。785（貞元元）年8月侍中となり、787（貞元3）年6月には司徒兼侍中になっている。795（貞元11）年、70歳で亡くなった。『旧唐書』巻134、『新唐書』巻155に立伝。

6-2 「救鉅鹿、取降臺、東破洹水陣」：この11文字は、一連の事件を述べたものとして解釈する。781（建中2）年、成徳節度使李宝臣が亡くなるや、その子李惟岳は世襲を画策した。しかし、唐朝はこれを許さなかったため、李惟岳は魏博節度使の田悦、平盧節度使の李正己らとともに兵を起こした。この年の5月、魏博節度使の田悦は兵馬使の康惜に邢州を攻撃させ、自らは臨洺県を囲んだ。邢州と臨洺（洺州管内）は、唐朝側の河北を牽制する拠点だった沢潞昭義軍節度使が管轄する地域である。7月、河東節度使の任にあった馬燧は、沢潞節度使の李抱真、神策先鋒都知兵馬使の李晟らとともに太行山脈を越えて、河北へ攻め込んだ。馬燧は臨洺を攻撃し、この結果、田悦は敗走し、邢州の囲みも解かれた。「救鉅鹿」とは、この間の経緯を指す。「鉅鹿」は「鉅鹿」と同じで、邢州の郡名。なお、この時の邢州・臨洺攻防戦の際には、馬燧の將軍に李奉国という人物が現れる。『旧唐書』巻134「馬燧伝」に、

悦は乃ち恆州の李惟岳の救兵五千を分ち以て朝光を助くれば、燧は軍を率いて朝光を攻め、田悦は萬餘人を將いて之を救わんとす。燧は乃ち大將の李自良・李奉國をして騎兵を將いて神策軍と雙岡に合して之を禦がしむ。

悦乃分恆州 李惟岳救兵五千以助朝光、燧率軍攻朝光、田悦將萬餘人救之。燧乃令大將李自良・李奉國將騎兵合神策軍於雙岡禦之。

とある記事に現れる人物である。蘇航〔2010, pp. 264-265〕によれば、この李奉国とは舍利石鐵の父親である舍利葛邏旃が唐より賜与された姓名であるという。つまり、石鐵は葛邏旃とともに馬燧指揮下で戦闘に加わったのである。上の記事には、李奉国が騎兵を率いたことが記されており、舍利石鐵親子は配下の騎馬軍団を率いて戦闘に参加したものと思われる。

「取降臺」は、よくわからない。ここでは「臺」を「地位の低い奴僕」の意味に解し、「降伏した兵士を収めた」と、一応解釈しておく。史実としては、馬燧は邢州における戦いのなか、雙岡で虜800人あまり、臨洺で900人を生け捕りにしたとあり、このことを指しているのかもしれない〔『旧唐書』巻134「馬燧伝」〕。邢州・臨洺で敗れた田悦は相州の洹水県に逃れ、そこに



陣を張ったが、翌782（建中3）年、馬燧は洹水で田悦を破った。「破洹水陣」とはこの戦いを指す。以上の経緯は、『資治通鑑』巻227「徳宗建中2年5月条」・「同年7月条」・「建中3年正月条」を参照。

6-3「拔河中城」：河中城は河中府のこと。もとは蒲州といったが、720（開元8）年に中都を置き、河中府と改めた。現在の山西省永濟市蒲州鎮に遺跡がのこる。誌文のいう「河中城を抜く」とは、784（興元元）年から785（貞元元）年8月にかけて、李懐光を中心とした河中での反乱を馬燧が平定したことを指す。李懐光は783（建中4）年に涇原の兵が推した朱泚が京師で反したとき、これを征討敗走させたが、吐蕃に対する援護問題をめぐり陸贄らと対立し、謀反の疑いを受けた。そのため、翌784年に反旗を翻し、朱泚の軍と連合した。この反乱は拡大したが、馬燧によって追い込まれ、最期は朔方部将牛名俊に殺された。『旧唐書』巻121「李懐光伝」、『旧唐書』巻134「馬燧伝」、『新唐書』巻155「馬燧伝」、『新唐書』巻224「叛臣伝上 李懐光」を参照。

7-1「遷犬戎以安河曲」：786（貞元2）年冬に吐蕃大将尚結贊は塩州・夏州を陥れ、その大軍は鳴沙に屯した。そこで馬燧は討伐するために石州に行ったところ、結贊は馬燧を恐れ、清水の会盟を再び結ぶこと、また今まで侵攻してきた土地を返還することを条件に、講和することを願った。馬燧は石州より黄河を渡ることはせず、吐蕃の意見を聞き入れて、論頬熱を引き連れて入朝し徳宗に会盟の許可を願った。徳宗は以前からウイグルを疎んでいたので、吐蕃と共同してウイグルと対抗しようという目論見から、この和平会盟を許可した。787（貞元3）年閏5月15日、侍中渾瑊と尚結贊は平涼にて盟約を結ぼうとしたが、尚結贊は数万にも及ぶ兵を従え、渾瑊を襲った。渾瑊は逃げ延びたが、多くの渾瑊の兵は殺されるか生け捕りにされた。これを「平涼の偽盟」という。吐蕃が偽盟事件を起こした目的は一つに唐の第一級の闘将を捕えること、また、馬燧の地位を落とすことにより、唐軍の軍事的指揮力の低下であった。以上は佐藤 [1959, pp. 656-658] を参照。会盟が破綻に終わり、吐蕃は西へ戻り河曲は守られたと言っても、その代償は大きかった [佐藤 1959, pp. 638-651]。この一文は馬燧によるこれら一連の遠征を指す。

本墓誌でいう「犬戎」は、吐蕃を指す。唐朝と吐蕃が盟約を結ぶことになったとき、当時太尉・中書令であった李晟が、

晟之を聞き、泣きて親しくする所に謂いて曰く、吾、西陲に生長し、備さに虜の情を諳んず。論奏する所以は、但だ朝廷の犬戎の侮る所と為るを恥づればなるのみ。

晟聞之、泣謂所親曰、吾生長西陲、備諳虜情。所以論奏、但恥朝廷為犬戎所侮耳。

と言っている [『資治通鑑』巻232「徳宗貞元3年」]。

また、ここでいう「河曲」は、狭義には尚結贊が駐屯した靈州の鳴沙県を指し、広義には吐蕃が占領した靈州から塩州・夏州までのオールドスを指す。『旧唐書』卷196下「吐蕃下」には、

（貞元3年）初め、尚結贊、既に鹽・夏等の州を陥れ、各々千餘人を留めて之を守らしめ、結贊の大衆、鳴沙に屯す。去る冬より春に及び、羊馬は多く死し、糧餉は給せず。

初、尚結贊既陷鹽・夏等州、各留千餘人守之、結贊大衆屯於鳴沙。自去冬及春、羊馬多死、糧餉不給。

とあり、吐蕃の尚結贊がこれらの地域を占領したが、家畜が多く死んだことが伝えられる。また、平涼の偽盟締結時に、吐蕃が渾瑊軍を裏切り襲撃した後、尚結贊が述懐した言葉が『資治通鑑』卷232「徳宗貞元3年5月甲戌条」に次のようにある。

〔尚結贊は〕馬燧の姪龔に謂いて曰く、「胡は馬を以て命と為し、吾れ河曲に在り、春草、未だ生えず、馬は舉足する能わず、當に是の時、侍中、河を渡りて之を掩はば、吾が全軍、覆没せり。所以に和を求め、侍中の力を蒙る。全軍をして歸るを得れば、奈何ぞ其の子孫を拘せん」と。

謂馬燧之姪龔曰、「胡以馬為命、吾在河曲、春草未生、馬不能舉足、當是時侍中渡河掩之、吾全軍覆没矣。所以求和、蒙侍中力。今（令）全軍得歸、奈何拘其子孫」。

これによると、吐蕃軍が駐屯していた地域を「河曲」と呼んでいる。

7-2 「賈勇」：勇気があることを売り込む。また、自分の勇気があることを誇る様。

7-3 「捐軀」：国家の為に正義を尽くして死ぬこと。

7-4 「何媿張遼」：張遼（169～262）は三国時代の魏の雁門馬邑県の人。字は文遠。諡は剛侯。はじめ呂布に従い、その後曹操に従った。合肥の戦いでは先頭に立って敵陣に突入し、逃げた孫権を追いかけるなど、その戦いぶりが賞賛されている [『三国志』卷17、魏書「張遼伝」]。ここでは、「圍を突き刃に觸るる」という舍利石鐵の戦闘の様が、張遼に恥じないものであると例えられている。

8-1 「□衆□生、寧慙關羽」：前半は文字が欠け、文意不明。関羽（?～219）は三国時代の蜀の劉備に仕えた武将。字は雲長。河東郡解県の人。曹操に捕えられ曹操のために功績を為したが、忠義を尽し、劉備の所へもどった。その後、荊州を預かり、劉備が益州を攻略する間、そこを守り曹操や孫権に圧力をかけていた。劉備が益州を治めた後、功績を高く評価された。その後、樊城の戦いにおいて孫権によって斬首された [『三国志』卷36、蜀書「関羽伝」]。ここでも、舍利石鐵の様子を関羽に引けを取らないものと例えているが、具体的なさまは不明。

8-2 「魏橋」：「橋」の次の字は拓本写真では判然としない。ところで、洹水における馬燧と田悦の戦いを記した『旧唐書』卷12、徳宗本紀、建中3（782）年7月庚子条に、

(建中三(782)年七月)庚子、馬燧・李懷光・李抱真・李芄等四節度の兵は退きて魏橋を保つ。朱滔・王武俊・田悅の衆も亦た魏橋の東南に屯し、官軍と河を隔てて對壘す。

庚子、馬燧・李懷光・李抱真・李芄等四節度兵退保魏橋。朱滔・王武俊・田悅之衆亦屯於魏橋東南、與官軍隔河對壘。

とあり、上に見た「東破洹水陣」において馬燧等が「魏橋」で河北藩鎮軍と戦ったことがわかる。拓本写真を見ると、問題の字の残画とも齟齬がないため、「橋」を補う。上の文は、『旧唐書』卷134「馬燧伝」では「(建中三年)七月、燧與諸軍退次魏縣。(中略)田悅・朱滔・王武俊軍亦至魏縣、與官軍隔河對壘」とされていて、魏橋は魏縣にあったことがわかる。魏縣は『太平寰宇記』卷54「河北道3 魏州」に、州の西40里の距離にあったことが記されている。この時の魏橋での戦闘は膠着状態に陥り、朱滔らは同年十一月に魏縣で王号を自称している[『旧唐書』卷12「徳宗本紀」]。

8-3「迴日」:「他日」の意味をとった。この8行目の「侍中嘉其勇録其功魏橋迴日表封狄道郡王」は解釈が困難である。当初、「橋」の字が判読できず、「侍中嘉其勇、録其功。魏□迴日、表封狄道郡王」と切って読み、「魏□迴日」は文意不明としていた。後にほぼ間違いなく「橋」が比定できたが、これを「迴日」にかけると意味がとりにくい。そこで、本稿では「魏橋」と「迴日」とを分けて、二句からなるものと解釈しておく。

8-4「舉□」:拓本写真では字が欠け、判読できない。「舉為」が適当か。

9-1「守位」:職につとめる。

10-1「辰朝」:「晨朝」のことか。「辰」と「晨」は早朝の意で通じる。「晨朝」でもやはり早朝の意。『旧唐書』卷152「王栖曜伝」に、

浙西節度使の韓滉は栖曜に命じて強弩數千を將いて、夜に寧陵に入らしむ。〔李〕希烈は之れを知らず、晨朝、弩矢は希烈の坐幄に及ぶ。

浙西節度使韓滉命栖曜將強弩數千、夜入寧陵。希烈不之知、晨朝、弩矢及希烈坐幄。

とある。

10-2「乙夜」:日没から夜明けまでを五つに区切ったうちの二番目。午後10時ごろを指す。『漢旧儀』に次のようにある。

中黄門五夜を持す。甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、<sup>ぼや</sup>戊夜なり。

中黄門持五夜。甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜也。

10-3「臨汾里」:唐太原城内か、城外にあった里名だろう。現在のところ、他の墓誌銘などからは確認できない。

10-4「人之云亡邦國殄萃」:『詩経』「大雅 瞻卬」の

不弔なり 不祥なり、威儀 類からざればなり。人之<sup>こ</sup>れ云<sup>に</sup>亡<sup>び</sup>、邦國 殄瘁す。

不弔不祥、威儀不類。人之云亡、邦國殄瘁。

を踏まえた表現。「殄瘁」は病み、疲れるの意味。そこから派生して、人口が減り、国力が衰退することも意味する。本墓誌では「萃」だが、この字は苦しむという意味で「瘁」と通じる。

11-1 「連嘶征馬」：征馬には、①旅で乗る馬と、②陣中で乗る戦馬という意味の二つがある。「連嘶征馬」という形で現れる用例として、白居易の詩「生別離」[『全唐詩』巻435]に、

征馬<sup>しき</sup>連りに嘶<sup>いなな</sup>きて行人出づ

征馬連嘶行人出

とあるが、これは旅立ちの情景をよんだものである。本墓主が武人であることから、ここでは②「戦馬」の意味に解しておく。

11-2 「聲咽筋簫」：「聲咽」は、むせび泣くこと。「筋簫」は白居易「元相公挽歌詩三首」[『全唐詩』巻449]に、

墓門已に閉じて筋簫去る。ただ夫人の休まず哭する有り。

墓門已閉筋簫去。唯有夫人哭不休。

とあるように、葬儀の際に奏でられる楽器。

11-3 「情傷薤露」：「情傷」は心が悲しみいたむこと。「薤露」は貴人の葬式の際にうたう挽歌を指す。晋・崔豹の『古今注』巻中、音楽3に、

薤露・蒿里、並びに喪歌なり。田横の門人出だす。横自殺し、門人<sup>之</sup>に傷つきて為に悲歌を作り、言えらく人命薤上の露の如く、晞滅し易きなり。また謂えらく人死して、魂魄蒿里に帰す、故に二章を用う。(中略) 孝武帝の時に至り、李延年乃ち二章を分かちて二曲を為り、薤露は王公貴人を送り、蒿里は士大夫庶人を送り、柩を挽く者をして之を歌わしむ。世も亦た呼びて挽歌と為す。

薤露・蒿里、並喪歌也、出田横門人。横自殺、門人傷之、為作悲歌、言人命如薤上露、易晞滅也。亦謂人死、魂魄歸于蒿里、故用二章。(中略) 至孝武帝時、李延年乃分二章為二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之。世亦呼為挽歌。

とある。

12-1 「遷殯」：棺を遷すこと。棺を埋葬すること。「殯」は「人が死んで葬するまでの間、屍を棺に斂めて、仮に安置しておくこと」[西岡 2002, p. 228]。

12-2：義井村：本文より、太原城の城北に義井村があったことがわかる。また、明・胡謐撰『山西通志』巻57には、

三角城は太原県治西北二十里義井村に在り。一名徙人城、又の名は提胡城なり。

三角城、在太原縣治西北二十里義井村。一名徙人城、又名提胡城。  
とあり、義井村に三角城があり、それが太原の西北二十里にあるとする。

13-1 : 「生事愛敬、死事哀戚」：『孝経』「喪親章」の、  
生事に愛敬し、死事に哀戚す。  
生事愛敬死事哀戚。

を踏まえた表現。親が生存しているときは敬愛をもって親につかえ、親の死に際しては、生きているときと同じ心でこれにつかえ、哀戚の心をもって親の霊を悲しみ慕うという意味。

13-2 「泣高柴之血」：高柴は春秋時代の衛の人で、字は子羔。子臯とも言う。孔子の弟子。『礼記』「檀弓上」に、

高子臯の親の喪を執るや、泣血すること三年、未だ嘗て齒を見せず。

高子臯之執親之喪也。泣血三年、未嘗見齒。

とあり、注に「泣無聲如血出（聲無く血の出るが如く泣く）」とある。「泣血」とは、悲痛のあまり血が音を立てずに流出するように声をたてないで涙を流して泣くことをいい、後世、親の喪に服する意に用いられた。

13-3 「絶曾子之漿」曾子は春秋時代の思想家で、本名は曾参、字は子輿。高柴と同じく孔子の弟子であり、後に『孝経』を著したとされる。『礼記』「檀弓上」に、

曾子思に謂ひて曰く、伋、吾親の喪を執るや、水漿口に入らざるは七日。

曾子謂子思曰、伋、吾執親之喪也、水漿不入於口者七日。

とあり、曾子が親の喪に服したときに、七日の間、水や飲み物を口にしなかったと子思に対して述べている。

14-1 「□石爲銘」：拓本では欠けていて読めないが、この部分は常套句なので、「刻」「貞」「刊」「勒」などの字を補うことができる。ここでは仮に、「刊」を補う。

15-1 「雄々□□、諤々良才」：「雄」字の下は拓本からは判別できないが、後句の「諤々良才」と対になる表現と考え、「雄々」と解釈した。意味は、すぐれたさま。「諤諤」は、「岳岳」に通じる。人の正確が剛直な様をいう。「良才」は、よいはたらき、また、そのはたらきある人の意味。

15-2 「前驅之用」：「前驅」はさきがけ、先鋒の意味にとる。墓誌文7行目の「先登」という言葉と対応すると考える。

16-1 「□河逝水東流不迴」：「逝水」は流れ行く川水、一度去って再び還らないもののたとえ。孟郊の詩「達士」【『全唐詩』卷373】に、次のようにある。

四時は逝水の如く、百川皆東に波す。青春去りて還らず、白髮鑷じょうすること更に多し。

四時如逝水、百川皆東波。青春去不還、白髮鑷更多。

16-2 「東流」：本来は、東に向かって流れる意だが、転じて、物事が消え去って戻らないたとえとなった。岑參の詩「登古鄴城」〔『全唐詩』卷199〕に、次のようにある。

漳水東流して復た回らず。

漳水東流不復回。

## 2 舍利葛邏旃の帰順時期について

被葬者の父、葛邏旃が唐に帰順した記事は、「父葛邏旃、往因九姓離散、投化皇朝、授蕃州刺史」とあるのみである。「九姓」とは、ウイグルがその中から台頭したトルコ系遊牧民の九部族連合である「九姓鉄勒 Toquz Oγuz」の略称であることは疑いない。この記事の年代に関して、蘇航〔2010, p. 263〕は、「九姓離散」とは安史の乱後の混乱によって九姓鉄勒がばらばらになった状況を指すと指摘し、「投化皇朝」とは、葛邏旃が僕固懐恩の息子である僕固瑒の反乱軍中におり、瑒を殺害して唐に投降したこと（後述）を指すと述べる。

しかしながら、安史の乱後に北中国にいた九姓がいかに離散したのか、その具体的状況が論じられていないうえに、九姓が離散した時期と葛邏旃が唐に帰順した時期に時間差を見出すことは、この誌文からは難しい。そもそも、安史の乱後に離散する以前に舍利氏がどこにいたのかその説明もなく、そのまま受け入れることは難しい。では、何をきっかけにして葛邏旃は唐に降ったと考えるべきであろうか。

蘇航〔2010, pp. 262-263〕が指摘するように、葛邏旃は『旧唐書』卷161「李光進伝」に、

李光進は、本と河曲の部落稽の阿跌の族なり。父の良臣は、雞田州刺史を襲い、朔方軍に隸う。光進の姉は舍利葛旃に適くに、僕固瑒を殺して河東節度使の辛雲京に事う。光進兄弟は少くして葛旃に依り、因りて太原に家す。

李光進、本河曲部落稽阿跌之族也。父良臣、襲雞田州刺史、隸朔方軍。光進姉適舍利葛旃、殺僕固瑒而事河東節度使辛雲京。光進兄弟少依葛旃、因家于太原。

として現れる舍利葛旃と同一人物であると考えられる。僕固瑒が殺害されたのは、『資治通鑑』卷223「代宗広徳二年二月癸酉条」によると764（広徳二）年2月のことなので<sup>1)</sup>、舍利葛邏旃の唐朝帰順のきっかけとなった九姓の離散はそれ以前のことである。とはいえ、被葬者の舍利石鐵は790（貞元六）年に58才で死去しているので、743年生まれということになり、九姓の離散

1) 『旧唐書』卷11「代宗本紀」は763（広徳元）年十二月に僕固瑒殺害の記事を載せるが、『資治通鑑』卷223「代宗広徳二年二月戊寅条」所収の「考異」の考証に従い、翌年2月とする。

はそこから大きくは遡るまい。

そこで、当てはまりそうな大規模な遊牧民の帰順を検索すると、716年に突厥第二可汗国第2代のカプガン可汗が死去した前後に国内が混乱し、その混乱時に多くの遊牧民が唐へと亡命している。さらに、741~744年に突厥第二可汗国が九姓鉄勒を中心としたトルコ系部族連合の反乱によって崩壊した際に、その遺民集団が漠南の陰山山脈周辺へと逃れて来ている [cf. 森安 1977b, pp. 9-10]。しかし、いずれにせよ離散したのは「突厥」であり、「九姓」の離散には当てはまらないため、不適切である。古代トルコ語碑文においても漢籍においても、「突厥 Türuk」と「九姓鉄勒 Toquz Oγuz」は区別がされており、同時代の墓誌でそのような単純な混同が起こると思えない。とすると、漢語史料においては誌文の九姓離散は見出すことができず、この記事は解釈できないのである。

ところが、ほぼ同時期に九姓離散に当てはまりうる事件が古代トルコ語史料に見出せる。その史料とは東ウイグル可汗国の初期に建造されたシネウス碑文であり、その碑文の北面12行目~東面7行目において言及されている、九姓鉄勒の内乱である [森安他 2009, pp. 11-14, 24-27, 34-36]。

突厥第二可汗国を滅ぼした九姓鉄勒部族連合は、ウイグルとその他の八部族とに別れて指導権争いを繰り広げることとなった。その際、八部族連合 (= 八姓鉄勒 <sup>セキズ=オグズ</sup> Säkiz Oγuz) を率いたのが、拔曳固 (あるいは勃曳固) Bayarqu 部のタイ = ビルゲ都督 Tay Bilgä Totoq である [森安他 2009, p. 57, sākiz oγuz の項]。八部族連合はさらに九姓タタル Toquz Tatar と手を結んでウイグルと戦ったが、ウイグルは749年中にこれらに勝利した。その最終的な勝利を伝える記述は、次の部分である。\*は原文で欠字のため読解困難な部分である。

(749年) 8月1日に私は「軍を出そう」と言った。(軍の) 纛が出陣しようとしたちょうどその時に、偵察の者が帰ってきた。「敵が来る」と彼らは告げた。敵と共にその首領が進軍してきた。8月2日にチギルティル湖畔よりカスイ(河)に沿って行進し、私は戦った。そこで勝った。そこから私は追撃をした。その月の15日に、ケイレの河源地帯のウチ = ビルキュで、タタル族と入り乱れて(戦い)、私が打ち負かした。その半分の民は(私に) 服属した。その半分の民は\*\*\*に竄入した。(東面5-7行目) [森安他 2009, p. 36]

この一連の戦いで敗れたタイ = ビルゲ都督は唐へと逃れ、749(天宝8載)年十月に朝廷に朝貢したことが、『冊府元龜』巻975「外臣部 褒異二」に記録されている [cf. 王静如 1938, p. 14; Kamalov 2003, p. 84]。今、その該当箇所を示せば、以下の通りである。

[天寶八載] 十月丁卯、九姓の勃曳固の大毗伽都督默每等十人來朝すれば、並びに特進を授け、錦袍金鈿帶魚袋七事を賜う。蕃に還る<sup>ゆる</sup>を放す。

十月丁卯、九姓勃戛固 大毗伽都督默每等十人來朝、並授特進、賜錦袍金鈿帶魚袋七事。放還蕃。

王静如によれば、この史料中に現れる「大毗伽都督」がタイ=ビルゲ都督の漢字音写であるとされている。名称の一致に加えて、唐に到来した年代も合うため、従うべき意見である。しかし、この『冊府元龜』の記事はあくまで朝貢を伝えるものであり、彼と彼の率いる集団がどうなったのか、明確にはされていない [cf. 森安他 2009, p. 56]。いな、そもそも彼が集団を率いて唐に降ったのかどうかこの記事だけでは明らかではない。ところが、彼が集団を率いて唐に帰順していたことは、ある墓誌の記事より明らかとなる。その墓誌とは、754（天寶13）年に作成された「郭英奇墓誌」である [『咸陽碑刻』, p. 68]。本墓誌の被葬者である郭英奇は隴右節度使となった郭知運の息子であり、744（天寶3）年に朔方節度副使に就任したことが誌文から判明するが、漢籍史料中にはその名が見えない [cf. 韓若春 1998]。その誌文の19行目に、

〔天寶〕九（750）載、安北城を築く及び降虜を應接するの勲を以て、左武衛將軍に遷す。

九載、以築安北城及應接降虜之勲、遷左武衛將軍。

という簡潔な記事がある。この墓誌の安北城とは、安北都護府のことと考えられる。

嚴耕望氏によれば、749（天寶8）年に木刺山の可敦城に横塞軍・安北都護府を置き、安北府は郭子儀を軍使として753（天寶12）年まで同地にあった。その所在地として、「中受降城西北五百餘里」 [『資治通鑑』卷216「天寶8載3月条」] とあることから、嚴耕望氏は西部陰山（狼山）北麓の烏拉特中旗に当たる可能性を示唆している [嚴耕望 1985, pp. 335-336]。この墓誌の記述は、その可敦城における安北都護府城建設の指揮を郭英奇がとったことを伝えていると考えられる。

本墓誌では、その安北城築城とともに挙げられている勲功として、「応接降虜」がある。この場合の「降虜」とは、唐に帰順してきた遊牧民のことを指していると考えられるべきであろう。そして、この降虜がどの集団を指しているか明確ではないものの、年代から考えればその前年の749年に唐にやってきたタイ=ビルゲ都督の率いた集団である可能性が高い。安北城築城も749年なので、両者がまとめて記される蓋然性は十分ある。

さらに、この安北都護府が置かれた西部陰山が、太宗時代に北モンゴルと南モンゴルをつないだ「参天可汗道」の南側の終点に当たり、北モンゴルの中央部からやってきた遊牧民が南モンゴルで最初に到達する地域であること [岩佐 1936, pp. 93-94] から考えても、この749年の安北城築城が北モンゴルから遊牧民が帰順してきたことに対応するためのものだった可能性は高いのである。とすれば、やはり『冊府元龜』の朝貢記事はただの朝貢ではなく、タイ=ビルゲ



都督は配下の集団を率いて西部陰山北麓へと逃れ、唐に降ったと考えるべきであろう。

以上の検討より、8世紀前半の唐北辺において、突厥の帰順だけでなく九姓鉄勒の帰順の事実が新たに明らかとなった。そして、この749年のタイ＝ビルゲ都督の帰順こそが、「舍利石鐵墓誌」に見える「九姓離散」とその後の唐への帰順に比定されると考えられる。舍利部はもともと突厥の一部族であるが、その集団の一部が突厥滅亡後、唐へと降らずに北モンゴルの九姓鉄勒のもとで生活していた可能性は十分にある。このようなことは、例えば東ウイグル可汗国がキルギズの侵攻によって滅亡した際、多くのウイグル人が四散していく中、キルギズによって制圧されたウイグルの本拠地オルホン平原にウイグル人が留まり続けていたという事例〔森安 1977a, pp. 109-110〕からも、十分起こりうると了解されるであろう。遊牧国家が崩壊して遺民の移動が起こった際に、その構成員がすべて移動するとは限らないのである。

舍利石鐵とその父の葛邏旃は、突厥第二可汗国が崩壊した際に南モンゴルへと降ることなく、北モンゴルでそのままタイ＝ビルゲ都督の集団に加わり、ウイグルと対峙して敗れたのである。唐に帰順した舍利親子は、おそらく僕固懷恩の指揮の下、安史の乱を唐側で戦ったのだらう。そう考えなければ本墓誌の中で「多難自り數十年、東西百餘戦し」と安史の乱を基点として舍利石鐵の事蹟を述べる理由が説明できまい。舍利石鐵親子は乱の終結後、そのまま僕固懷恩の反乱に動員されたが、裏切って河東節度使に帰順したと考えられる。

以上のように、東ウイグル可汗国で起こった動乱は、あくまで国内問題であり、唐から遠く離れた北モンゴルで起こったものであった。しかし、そこから派生した遊牧民の移動は、南モンゴルの唐北辺にまで影響を与え、安史の乱、僕固懷恩の乱という二つの重要な反乱に関わるものとなった。さらに、「郭英奇墓誌」によれば、陰山周辺に安北都護府を設置する動きとも連動するものであった。モンゴル高原と北中国の連関が、この墓誌より明らかとなるのである。

### 3. 「舍利石鐵墓誌」の史料的价值——今後の展望に代えて——

舍利石鐵は733年に北モンゴルの突厥第二可汗国で生まれ、父・葛邏旃の時代に起きた第二可汗国崩壊後にも北モンゴルに留まって九姓鉄勒に従った。しかし、九姓鉄勒国内で起きた勢力争いに巻き込まれ、ウイグルに敗れた反ウイグル派リーダーで拔曳固部首領のタイ＝ビルゲ都督とともに749年に唐に降った。その後、安史の乱を唐側で戦い、乱後には河東節度使の軍中で反乱鎮圧に活躍するなど、藩鎮体制下の唐の軍事力を支え、790（貞元6）年に58才で死去した。

本墓誌の史料的价值として、本稿第2章で述べたように、九姓鉄勒の内乱と敗残者の唐への亡命というトルコ系遊牧民の移動について示唆する点が挙げられる。非漢語史料に記された民

族移動のその後が長期に渡って追跡できることは極めてまれである。

しかし、本墓誌の価値はそれだけには留まらない。舍利葛邏旃は、婚姻によって北中国の遊牧勢力との間に関係をとり結ぶことに成功している。すなわち、第2章で触れた『旧唐書』「李光進伝」によれば、彼は阿跌部の出身である李光進の姉と結婚しているのである。阿跌とは九姓鉄勒の一派である Ädiz であり（「李光進伝」で「部落稽」とするのは誤り）[Chavannes 1903, p. 88, n. 3]、8世紀に唐に帰順した阿跌部には、713（開元元）年、靈州付近に羈縻州の鶏田州が設置されている [蘇航 2010, p. 262]。713年といえば、北モンゴルで716年に突厥第二可汗国第2代のカプガン可汗が殺害される直前に当たる。護雅夫氏によれば、カプガン可汗の晩年、708（景龍2）年頃から徐々に支配下部族の離反が活発となり、彼自身が九姓鉄勒の拔曳固部に殺害されるまでになるという [護 1964（1967）, pp. 194-198]。阿跌部の唐への帰順もこうした離反の一部と解するべきであり、カプガン治世末期の混乱を逃れて唐へと降ったと考えられる。

そして、阿跌部の李光進の姉と結婚した葛邏旃も、時期はずれるもののやはり北モンゴルから唐へ帰順した遊牧民の一派であった。モンゴル高原から唐へと帰順した遊牧民同士の婚姻がここで見られる。しかし、唐に従った遊牧民の婚姻は、帰順した者同士だけではない。例えば唐の将軍であった僕固懷恩は、安史の乱に際して唐側で参戦したウイグルの王子に対して、自分の娘を結婚させており、この娘は最終的にウイグルで皇后に当たる<sup>カトゥン</sup>可敦 qatun になっている [『旧唐書』 卷121「僕固懷恩伝」]。

以上のように、遊牧民の有力者同士が婚姻を結ぶ事例が史料中に散見される。当時のモンゴル高原・北中国における遊牧民の婚姻が果たした歴史的意義を検討することは今後の大きな課題であり、その検討において本墓誌は大きな価値を有するのである。また、舍利葛邏旃と義理の兄弟となった李光進には、父の李良臣、弟の李光顔とともに長大な墓碑があり<sup>2)</sup>、これらの墓碑と合わせて本墓誌は検討する必要があるだろう。

加えて、本墓誌には舍利石鐵が河東節度使の指揮下で多くの戦闘に参加した事実が記述されている。第1章で述べたように、舍利石鐵の父親の葛邏旃もまた、李奉国の名を賜与されて河東節度使指揮下で騎馬軍団を率い、親子ともども邢州・臨洺攻防戦に従軍していた。山下将司氏は、唐代前半期の羈縻州体制が堅固だった時期のみならず、唐代後半期の軍鎮体制下においても遊牧民は、部落長のもと部落単位で唐に従い、戦時には従軍していたことを明らかにしている [山下 2011, pp. 4-11]。舍利石鐵親子が同じ戦闘に従軍している点や、葛邏旃が羈縻州の

2) 「李良臣碑」は『全唐文』 卷714に、「李光進碑」は『全唐文』 卷543に、「李光顔碑」は『全唐文』 卷632に収録されている。

リーダーと考えられる「蕃州刺史」に任命されている点を考慮すれば、舍利氏もまた旧来の部落単位で服属しており、舍利石鐵親子は部落長の立場で配下の遊牧騎馬兵を指揮して従軍したと考えられよう。節度使指揮下においてトルコ系遊牧民がいかにして軍事的に貢献していたのか、詳しい解明はほとんど行われておらず、本墓誌の記述は貴重な実情を伝えるものとなっている。上で述べた阿跌一族もまた、部落を率いて朔方節度使の戦力の一翼を担ったことが指摘されている [山下 2011, p. 7]。このように、唐後半期の遊牧騎馬軍団の研究は、藩鎮研究ともリンクして、今後ますます重要になるだろう。

付記：本研究は、第1章が科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「『農業・牧畜境界地帯』から構築する新しいユーラシア史像の試み」、第2、3章が「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用の研究拠点形成」による研究成果の一部である。

【参考文献、その他】(ABC順)

- 『咸陽碑刻』=李慧／曹發展(注考) 2003:『咸陽碑刻』(上下冊)(陝西金石文獻彙集)西安,三秦出版社。  
 Chavannes, E. 1903: *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*. Paris.  
 馮培紅 1997:『晚唐五代宋初歸義軍武職軍將研究』鄭炳林(主編)『敦煌歸義軍史專題研究』蘭州,蘭州大學出版社, pp. 94-178。  
 韓若春 1998:『陝西興平發現唐郭英奇墓誌』『文博』1998-3, pp. 72-73, 11。  
 石見清裕 1987(1998):『唐の突厥遺民に対する措置』同氏『唐の北方問題と國際秩序』汲古書院, pp. 109-147。  
 岩佐精一郎 1936:『突厥の復興に就いて』和田清(編)『岩佐精一郎遺稿』岩佐傳一發行, pp. 77-167。  
 Kamalov, A. 2003: The Moghon Shine Usu Inscription as the Earliest Uighur Historical Annals. *Central Asiatic Journal* 47-1, pp. 77-90。  
 金成奎 2000:『唐から宋前期までの蕃兵制』同氏『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院, pp. 195-215。  
 馬馳 2011:『唐代蕃將』(大長安書系)西安,三秦出版社。(初版:『唐代蕃將』西安,三秦出版社,1990)  
 護雅夫 1964(1967):『突厥と隋・唐兩王朝』同氏『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社, pp. 161-223。  
 森部豊 2010:『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大學出版部。  
 森安孝夫 1977a:『ウイグルの西遷について』『東洋學報』59-1/2, pp. 105-130。  
 ——— 1977b:『チベット語史料中に現れる北方民族——DRU-GUとHOR——』『アジア・アフリカ言語文化研究』14, pp. 1-48。  
 ——— 2007:『シルクロードと唐帝國』(興亡の世界史 第05卷)講談社。  
 森安孝夫／鈴木宏節／齊藤茂雄／田村健／白玉冬 2009:『シネウス碑文訳注』『内陸アジア言語の研究』24, pp. 1-92。  
 村井恭子 2003:『押蕃使の設置について——唐玄宗期における対異民族政策の転換——』『東洋學報』84-4, pp. 29-60。  
 西岡弘 2002:『中国古代の葬禮と文学』汲古書院。  
 齊藤茂雄 2011:『突厥「阿史那感德墓誌」訳注考——唐羈縻支配下における突厥集團の性格——』『内陸アジア言語の研究』26, pp. 1-38。  
 佐藤長 1959:『古代チベット史研究 下卷』(東洋史研究叢刊之五之二)東洋史研究会。

- 蘇航 2010：「唐後期河東北部的鉄勒勢力——從鷄田州の変遷説起——」『唐研究』16, pp. 261-277.
- 孫繼民 1995：『唐代行軍制度研究』（文史哲大系87）台北，文津出版社。
- 鈴木宏節 2006：「三十姓突厥の出現——突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢——」『史学雑誌』115-10, pp. 1-36.
- 谷口哲也 1978：「唐代前半期の蕃将」『史朋』9, pp. 1-24.
- 王静如 1938：「突厥文回紇英武威遠毗伽可汗碑訳釈」『輔仁学誌』7-1/2, pp. 1-55.
- 渡邊孝 1994：「唐藩鎮十将攷」『東方学』87, pp. 1-16.
- 山下将司 2011：「唐のテュルク人蕃兵」『歴史学研究』881, pp. 1-11.
- 巖耕望 1985：「唐代安北单于兩都護府考」同氏『唐代交通図考（一）』（中央研究院歷史語言研究所專刊之八十三）台北，中央研究院歷史語言研究所，pp. 323-340.